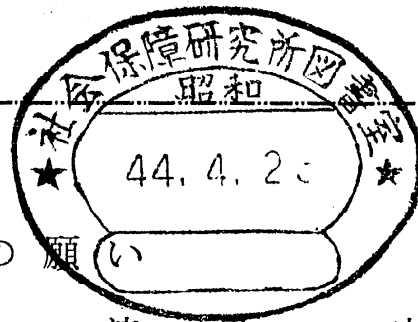




## 老人福祉への願い

渡 辺 定

現代の人類の平均寿命は、むかしに比べて数倍となり、史上かつてない多人数の人々が高齢に達するようになった。4,000年前は人間の平均寿命は、たった18年の短さといわれ、2,000年前でも22年、100年前も男子34年、女子38年前後、20世紀初めでも男女とも50年以下であった。現在は北欧の長寿国は男子72年約、女子76年約になった。

見方を変えて、リンドハイムの推計によるに、1,000年前は王侯貴族でも100人生れて、60歳にとどくのは男女ともたった8人、300年前でも男13人、女子17人、100年前でも男子34人、女子37人ぐらいしか60歳になれなかった。

国民生活も向上し、医学も進歩した今日、北欧長寿国では100人生れて、男子88人、女子90人が60歳に達し、男子67人、女子78人が70歳に、また男子36人、女子49人の多数が80歳以上となる。すなわち、3分の1から2分の1まで80歳にとどく。

数字が重なって恐縮であるが、40歳の人100人では、60歳には男子81人、女子94人、70歳には男子70人、女子80人、80歳には男子38人、女子51人というように、多数が高齢に達する。しかも、これら的高齢到達の人数は健康度強弱を合せて得た国民における数字である。強健な人々は、もっと多い割合で高齢に達すると考えなければならない。

日本人の場合は、北欧よりも1、2割高齢到達の人数は少いが、その割合が大であることは同じである。しかも戦前に比して高齢に達する割合は2、3倍に上っている。

これらの現代の文化国における事実は、高齢の人々の「第三の人生」の重要性がますます増したことを教えている。現代に生きるわれわれは、自分の「第三の人生」を「みより多き健康長寿」の境地におくため、中年以前よりの努力が必要なことを忘れてはならない。現在の老年学は、老化現象の原因について、原子生化学の域までその研究の手をのばしているが、まだ完全に解明されているとはいえない。しかし現在水準の知識からみても健康生活を送ることによってある程度の老化を遅らせ、さらに老年病による永い臥床も予防可能である。その意味でかような予防の方向の社会の活動、個人の実践が強力に行われることを念願している。老人の数の増すとともに、身体不自由や長い臥床の老人の増すことについてはベルザール博士のいうごとく、先進各国も一番悩んでいる問題であるので、日本でも少しでも減少するような予防対策への努力が重要と考える。また日本では、既に臥床している老人に対する努力は率直に言って非常に乏しい。特別養護老人ホームの急速な増設、家庭奉仕員の増員も必要であるが、私は日本にも、イギリスなどに数多くある老人看護サービスの篤志団体の発展が望ましいと思っている。日本では「カソリック」でこの種の活動が行われており、筆者も新宗教団体で行わないかと二、三話しかけて見たが不成功であった。日本でのかような篤志団体の発展も、筆者の老人福祉への悲願の一つである。

また遠い将来の憂いの一つとして、日本でも壮年以後の精神障害者がアメリカのように増加するのではないかという心配がある。予防対策樹立のため、権威者の総合研究が切望される。

今一つ、筆者の悲願がある。日本でも最近、核家族が増し、老親は子夫婦と別居せざるを得なくなり、親子の愛情の疎遠化がいわれている。従来、学者の間に、文化が進むほど親子の家族のつながりは疎になるといわれたが、最近の英国のタウンゼン博士、デンマークのフリース博士、米国のシャーナ博士の三国での共同調査や、オーストリアのローゼンマイヤー博士の調査の結果、諸外国では、親子は別居しても小供の1人は近所に住み、ほとんど毎日誰かが親に会っている。すなわち親子の真情が環境の不利も克服するに至ったということになる。日本でも、住宅政策その他の対策を考えるに当り、このような視点が望ましい。